

## 『漢書』記載匈奴人の「摔胡」という「技」に関する一考察

富川力道

キーワード： 漢書 金日磾 摔胡

### 1. 問題提起

モンゴル相撲「ブフ」の研究において、その文献学的研究は、天海<sup>1</sup>と金啓琮<sup>2</sup>の論文を除いては皆無に近い。それは13世紀以前のモンゴル語文献がほとんどないこと、また中国語の文献における記述が断片的であること、そしてそもそもブフ研究者の数が少なく、文献資料の発掘が不十分であるなどに起因するだろう。

本稿は、中国の正史の一つで、紀元前32-後8年に編纂された『漢書』における匈奴人に関する記載を検討するものである。『漢書：霍光金日磾伝』<sup>3</sup>には「日磾摔胡投何罗殿下，得禽缚之」（日磾は胡を摔み何羅を殿下に投げ、之を捕まえて縛るなり）という記載がある。「日磾」とは漢王朝の捕虜となった匈奴人の若者金日磾（jin midi、ジンミディ、中国語ではジンは標準的な発音で武帝が下賜した姓であり、ミディは特殊な読み方である）のことである。

本稿では、ここに出てくる「摔胡」（zuó hú、ズォーフー）について検討する。従来のブフ研究でほとんど取り上げられていない問題である。現時点において、上記の「摔胡」はブフの「技」に関するもっとも古い文献学的な情報である可能性が高く、それについて考察することはきわめて学術的価値が高いと考えている。

では、「摔胡」とはいったいどのような「技」だったのだろうか。それを明らかにする前に、まず金日磾という匈奴人が漢王朝の捕虜から重鎮になった経緯などを説明しなければならない。

---

1 天海謙三郎（1940）「清朝の文献より見たる蒙古の相撲一布庫一に付て」『蒙古研究』2-5号、蒙古研究会。

2 金啓琮「中国式摔跤源出契丹，蒙古考」『漠南集』、内蒙古大学出版社、1991年、pp. 138-182。  
\*同論文は、1954年3月北京にて初稿、1978年に内蒙古大学にて最終稿が完成し、1979年に『中国蒙古史学会成立大会紀年集刊』所収。1991年に『漠南集』に収録。2007年に『中国摔跤史—摔跤的源流和演变—中华民族对体育的贡献』という書名で凱和との共著書の形で内蒙古人民出版社より出版されている。

3 中国哲学書電子化計画（デジタル書籍）：『漢書：霍光金日磾傳』、中国哲学書電子化計画（ctext.org）

## 2. 金日磾という人物

司馬遷著『史記』によれば、漢の武帝に驃騎将軍に任命された霍去病（紀元前 140 年—紀元前 117 年）は、紀元前 121 年に、二回にわたって単独で匈奴を出撃し、「渾邪王の子および匈奴の大臣、武將どもをとりこにした。その戦果は斬首と捕虜あわせて八千名あまり、これに休屠王が天に祭るのに使った金の像<sup>4</sup>（金人一筆者注）をとってきた」と記載している。そして二回の出撃の際に、渾邪王と休屠王らは（大敗により単于に斬首されるのを恐れて一筆者注）相談して、漢武帝に投降しようと計画したが、休屠王が投降を思いとどまったために、渾邪王に殺害された。その休屠王の太子が日磾で、たった 14 歳だったが、父親の殺害されるのを見て、母と弟とともに霍去病に投降した。「この時の投降者は数万に達し」という。

『漢書：霍光金日磾伝』によれば、金日磾はその後漢王朝宮廷の裏方の馬番となった。ある日、武帝が遊宴を催し、馬を鑑賞することになった。日磾らの数十人が馬を牽き連れて、殿下の前を通る際、だれもが（武帝の周りの美女たちを）覗き見していたが、唯一日磾は、見向きもしなかった。日磾は身長八尺二寸（190cm—筆者注）、威厳ある容貌の持ち主で、その馬もよく肥えて上質だった。見初めた殿下は尋常ではないと思い、彼に確認したところ、日磾は素性を詳しく話した。そして武帝は特別視して、その日のうちに「湯沐させ衣冠を与えて」馬監に任命した。日磾はその後侍中、駙馬都尉、光祿大夫に昇格された。武帝は、霍去病によって匈奴から持ってこられた金人は休屠王が天神を祀るのに用いていたことを知り、日磾に金姓を下賜した。その後匈奴青年は金日磾と呼ばれるようになったのである。金日磾は誠実で忠義な人柄で慎み深かったため武帝の信頼を得ていた。武帝が崩御前、霍光と金日磾に昭帝を補佐するよう後事を託した。金日磾は車騎将軍になり、昭帝を補佐し、その即位 1 年あまり後の、紀元前 86 年 9 月に没した。金日磾は、死ぬ直前の病の床で列侯に封じら、死後に敬侯と諡<sup>おくりな</sup>され、武帝の墳墓である茂陵の近くに埋葬された。この辺りは現在、金日磾碑を含め、中国の重要文化財に指定されている。中国の 5 千年の歴史の中で異国の捕虜だった人物の墓が皇帝の陵墓と並ぶのは金日磾以外はなからう。

ところで、金日磾がこのような厚遇を受けたことにある事件における功績が大きく影響しているのである。そのキーワードとなるのが本稿で取り上げる「猝胡」である。そのいきさつは下記のとおりである。

紀元前 91 年に、漢王朝において武帝呪殺にかかわる巫蠱<sup>ぶこ</sup>之禍（日本では「巫蠱の乱」と呼ぶ）という重大な政治事件が起り、死者は数万人に及んだ。武帝の厚い信頼を受けていた江充が皇太子劉珧に嫌疑がかけられるよう仕組んだことを知った皇太子は挙兵し、江充らを殺害するも武帝軍に大敗

---

<sup>4</sup> 本稿の性格上、金人について述べる余裕はないが、羽溪了諦（1918）「休屠王の金人について」『史林』、第 3 卷第 4 号、pp.561 - 576 を参照されたい。

し自殺した。のちに武帝は一連の呪殺事件は政治的に仕込まれたことがわかり、江充一族を滅ぼした。そのことをもっとも恐れたのが、重合侯に封じられた馬通とその兄で江充と親交のあった侍中僕射（宰相に近い官職—筆者注）の馬何羅（「莽何羅」とも記される）であった。武帝が江充の宗族を誅殺すると、馬何羅らは禍が自分たちにも及ぶのではないかと恐れて、武帝の暗殺を企てたのである。しかし、すでに武帝の側近中の側近になっていた金日磾は馬何羅らの行動を怪しいく思い、「陰でひそかにその動静を監視していた（陰獨察其動靜）」。紀元前 89 年 6 月のある日の明け方、馬何羅が刃物を持ち宮中に侵入したとき、金日磾は「莽何羅、反したぞ！」と叫びながら、馬何羅に近づき、彼を投げ倒して捕まえた。その件に関して『漢書』には下記の通り記している。

日磾摔胡投何羅殿下，得禽縛之，窮治皆伏辜。

概訳すると以下のとおりである。

- ①日磾は何羅の頸を捕まえて、殿下（宮殿の床）に投げて捕まえて之を縛る。窮治し、皆辜罪とす。
- ②日磾は何羅を「摔胡」（という格闘技）を駆使して殿下に投げて、捕まえて之を縛る。窮治し、皆辜罪とす。

上記のように、二通りの概訳をつけたのは、「摔胡」に関する解釈が二通りあるからであり、本稿で考察する問題でもあるからである。いずれにしても、格闘技の末、相手を倒して捕まえたことは間違いない。

では、「摔胡」とはいったいどういう意味なのか、次節で詳述したい。

### 3. 「摔胡」に関する二つの解釈

「摔胡」に関する解釈は次の二通りある。一つは、「摔胡」を「頸を掴む」動作として語彙論的に解釈したもので、もう一つは、素手で戦う格闘技の名称として格闘技論から捉えるものである。以下、先行研究に基づきながら、両者の解釈について愚見を述べたい。

#### （1）「摔胡」に関する語彙論的解釈

西暦 100 年に後漢の許慎（生没年不詳。中国、後漢の学者）によって編纂された最古の部首別漢字字典である『説文解字』<sup>5</sup>によると、「摔」は「持頭髮也」、つまり「頭髮を掴む」の意で、「胡」は「牛顛垂也」、つまり、「垂れている牛の下顎、頤（おとがい）」のことである。また『康熙字典』<sup>6</sup>

5 『説文解字』：説文解字在线查询—词典网 (cidianwang.com).

6 『康熙字典』：中國哲學書電子化計劃 (ctext.org).

をはじめとする中国の代表的字典は同様に「胡を摔む」を「頸を掴む」として解釈している点で共通している。以上の解釈によれば、「摔胡」は「胡を摔む」、即ち「頸を掴む」という意味であり、「頸を掴んで投げる」という動作になる。このような動作として捉える場合は、上記の概訳は①のようになるだろう。

このように見てくると、「摔胡」は大相撲の決まり手「首投げ」に近いようである。首投げは、モンゴル国のブフでは、mushgikh（「捻る」の意）という技にもっとも近く、捻り系と投げ系、またその両者の組み技に分類される。しかし、B.Buyandelger、B.Enkh-Ulzii 共著『匈奴のブフ競技』の中で、現代のモンゴル国のブフの典型的な技と匈奴時代のそれを比較しているが、匈奴時代には上記のmushgikh に対応する技が確認できないとしている。最近では、モンゴル国のブフ研究家B.Buyandelger（ボヤンデルゲル）氏は「モンゴル国のブフでは腕で頭を抱える所作は技ではなく、組み手として解釈される」という見解を示している。またモンゴル国の国家ザーン称号（国家大ナーダムでベスト4進出者）を持ち、モンゴル国ブフ連盟の会長を務めるMagaljav（マガルジャブ）氏も同様の見解を示し、「首を抱える時両手がつながっていればGar kholboj mushgih（両手をつないで捻る）」と一般的に言われている」と説明している。両氏の見解によれば、「首を掴む」所作は「捻る」ための組み手であることが分かる。

一方、「首投げ」はフリースタイル・レスリングではよく見られるようである。内モンゴル人レスラーとブフ経験者らに聞いたところ、「Khuzuu achaa」、文字通り「首投げ」と教えられたそうである。内モンゴルスタイルのブフでは地方によって、Khuzuudej khuntrekh（「頸を掴んで投げる」の意）という表現も使われ、ここでも「頸」は組み手の位置を強調しているように思われる<sup>7</sup>。

『モンゴル秘史』140 節に「…ブリ・ボコはベルグテイを片手でつかまえて片脚で押し倒して、動けぬように抑え込んだことがあった。…ブリ・ボコは国の相撲取り〔なのであった〕」という記述がある。ブフに関する貴重な記録であり、しばしば引き合いに出されるものである。それは、13世紀のブフは、現在のブフのスタイルと異なり、レスリングのように抑え込むのが主流だったことを示唆している。つまり抑え込むのが勝敗を決するものだから、当ても「頸を掴む」ことは相手の動きを止めて一瞬に投げ倒すために使われていた動作であったことは想像にかたくない。

楊長明は「…角抵の名人である金日磾が〈摔胡〉で莽何羅を宮殿の下に投げつけた。…〈摔胡〉とは、相手の頭と首を掴み倒す技である」と述べている。「摔胡」の解釈はその通りではあるが、金日磾が角抵の名人であったかどうかは実際のところ不明で、再考の余地があろう。

以上の考察に基づいて言うならば、「摔胡」は文字通り「頸を掴む」所作であり、格闘技論から言

---

<sup>7</sup> ブフの技に関する見解はいずれも、令和4年12月初旬、インターネットを介して行われたインタビューによるものである。

えば、相手を制御するために使われた動作だと考えるのが妥当ではないかと考えられる。

## (2) 「摔胡」に関する格闘技論的解釈

「摔胡」を匈奴時代の格闘技として捉えるのは、中国の著名な武術家である馬明達氏である。そのような見方から捉える場合は、上記の概訳は②のようになるだろう。

馬明達氏は、1943年に中国の少数民族の一つである回族出身の馬氏家で生まれ育ち、兄弟四人とも武術家として活躍し、「馬氏四傑」の異名を持つ。現在広州暨南大学歴史学部の教授を務めており、歴史家としても知られている。馬氏は、1987年に中国語版『中華武術論叢書』第1期に「“手搏”初探」<sup>8</sup>という論文を掲載している。「手搏」とは素手で戦う格闘技の古称である。その中で「摔胡」を取り上げているが、管見によれば、それは「摔胡」に関するもっともまとまった論考である。

馬氏は、『漢書：霍光金日磾伝』における孟康（三国時代の人物）の「摔胡」に関する注釈である「若今相僻、卧輪之類也」（今の相僻、卧輪の類なり）を引き合いに出し、「相僻、卧輪」（古代の格闘技の一種か - 筆者注）は文献では確認できないため臆断できないと指摘しつつも、「摔胡」に近い専門技術用語だろうから、当然「摔胡」も専門用語であると結論付けている。不確定な用語から推測してすぐに「摔胡」を格闘技の一種と断定するところに望文生義のきらいはあるものの、「摔胡」に関する貴重な見解として注目に値する。

若干長くなるが、馬氏論文における「摔胡」に関する記述を引用すると以下の通りである（和訳は筆者）。

「摔」の出現はかなり早い。それから想像すると、技術そのものが絶えず完成するように、広義の「搏」（羽ばたく、打つ、叩く、捕る、捕まえる、掴むなどの意 - 筆者注）がついに発展して、専門的な「手搏」になったのと同じである。最初の「摔」は特定の技術性を含んでいなかったため、古文獻の中では時として「打つ」「搏つ」などの意味を派生している。「摔」が単純な「持頭」（頸を掴む）方法から次第に「頭を掴む」ことを核心とする一連の擒拿術きんなじゅつに発展すると同時に、「摔胡」という専門名称が発生し、一般的に広がったのだろう。「摔胡」という名称の発生はその技術的成熟の象徴であるとみることができる。

---

<sup>8</sup> 馬明達（1987）「“手搏”初探」『中華武術論叢書』第1期。ただし、本稿では、“手搏初探 / 自由微信 / FreeWeChat”にて、2016年に9月13日、馬明達の子、馬廉禎より公開した同論文を参照。馬廉禎によれば、同論文は1980年4月に初稿、1987年に馬明達主編上記著書に所収。2008年5月、『説劍叢稿』を刊行する際に加筆しているという。

われらの推測によれば、漢代の「摔胡」は効用実効性が非常に高かったようである。そうでなければ赤手空拳の金日磾が莽何羅を宮殿の下まで投げ、捕まえて之を縛ることができないからである。人によっては、金日磾が一挙に莽何羅を叩き伏せたのは、彼の忠誠と勇敢さが主要であって、「摔胡」に頼らなくてはならないことはなかったという見方もある。私が思うに、「摔胡」を用いて莽何羅を宮殿の下へ投げつけたと、歴史家が明記したのはまさに「摔胡」が決定的な役割を果たしたことを示しており、特筆に値するものだったのである。金日磾は匈奴の末裔であるから、「摔胡」が得意だったのも一因であろう。長期的かつ広範な社会的実践の中で、拳術が発展する長い過程において、「摔胡」は必然的に手搏と異路同帰で、相互濡染し、融合したと思われる。したがって、古人はしばしば「摔胡」を以って手搏と解釈している。

馬氏の論考をまとめれば、「摔胡」という名称の出現がその格闘技としての完結を示しているということになるだろう。しかし、『漢書』以外の文献では「摔胡」という格闘技の名称や記載は見られず（少なくとも現時点で筆者は発見しておらず）、馬氏が指摘するように、類似の格闘技であろう「相僻、卧輪」同様に臆断を下してはならない。

金啓孫によれば、漢武帝の時代に、春と夏に二回「角抵大会」を開いた可能性があり、さらに匈奴、烏孫など北方民族の使節団を宮廷に招き入れ、「大角抵」を楽しんだという文献記載がある。それは匈奴でも「角抵」が盛んだったことを意味するものである。

宋代初めころの調露子が著した『角力記』は九世紀後期の中国における最初の角力専門著書で、角力について体系的に記述している奇書である。その中に次のような記述がある。

「武帝時、西域健胡趨捷無敵、晋人莫（能校力）〔敢与校〕」。

概訳すると、「武帝の時、西域の強健な胡人は機敏な動きをし、無敵であり、晋の人は誰一人太刀打ちできない」となる。この武帝は、晋武帝司馬炎（在位 265–290）のことである。西域の胡人には匈奴を含む北方、西方の異民族が含まれるのが一般的である。そこでそれらの胡人は非常に強く、当時の晋には勝てる人がいなかったほどである。それは古代中国と匈奴間の角抵交流が盛んだったことを暗示している。そのような背景を考えると、「摔胡」は角力ないし角抵という格闘技の中の、一つの重要な技の一つか重要な組み手の一つになっていたことは推測できる。

#### 4. まとめ

本稿では、中国語文献『漢書：霍光金日磾伝』記載の匈奴人金日磾が何羅（莽何羅）を捕まえたという一文にある「摔胡」について初歩的な検討を加えた。「摔胡」については、語彙論的な解釈と格

闘技論的な解釈があることを指摘した。前者は、「摔胡」について「頸を掴む」動作として解釈しているのに対し、後者は「摔胡」を専門的な格闘技の名称として捉えている。

現在のブフにおける技認識の見地からして、「頸を掴む」動作は独立した技ではなく、相手の動きを止めて、投げや捻りの技に持ち込むための組み手と見るのが妥当ではないかと考えている。つまり、当時の角抵などの格闘技の重要な組み手の一つであったと推論できよう。他方、「摔胡」を格闘技名称とみる馬明達氏の論考は否定はできないものの、より多くの文献学記載を発見しない限り、「摔胡」を格闘技名称と見るのは時期尚早であると考えている。というのは、「摔胡」が格闘技である証拠を見つけ出さないかぎり、不確定な名称と注釈から類推して決めつけることは無理があると思われる。また匈奴時代に盛んだった角抵・角觥との関係性を明らかにしない限り、「摔胡」を格闘技名称として考えるのは根拠に乏しいと言わざるを得ない。

『漢書』に「摔胡」が匈奴人金日磾とかかわっていることはきわめて興味深いことであり、当時としては「反逆者を投げつけた」技だったことが技研究の一環として重要であろう。『漢書』では出来事そのものに焦点が与えられたのであって、それがいかなる「技」だったかについては述べていないが、ブフの「技」の貴重な記録として注目に値する。

#### 【参考文献】

翁士勲（1990）『《角力記》校注』人民出版社。

司馬遷著『史記』。ただし、本稿では、貝塚茂樹・川勝義雄訳（1968）『司馬遷 史記列伝』（第五十一 衛將軍驃騎列伝）中央公論社を参照。

富川力道（2017）「日本モンゴル力士の〈決まり手〉に関する比較研究—スポーツ実践の人類学からのアプローチ—」『教育研究フォーラム』通号8号、pp.14-27。

（2018）「ブフと相撲におけるわざ認識」『教育研究フォーラム』通号9号、pp.16-20。

村上正二訳注（1988 [1976]）『モンゴル秘史—チンギス・カン物語—』平凡社。

楊長明（2015）「中国朝鮮族シルムのエスノグラフィ—」（早稲田大学博士学位論文、早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科）

Батмөнхийн Буяндэлгэр, Бирозанын Энх-Өлзий (2011). ХҮННҮГИЙН БӨХИЙН БАРИЛДААН. УБ.

（とみかわ りきどう・日本ウェルネススポーツ大学）

## A Study on the "Technique" of the Xiongnu people called Zuohu described in "History of the Han Dynasty"

Rikido TOMIKAWA

The Zuohu used by the Xiongnu in "History of the Han Dynasty" can be seen as a mechanism to stop the opponent's movement and bring it into the throwing and twisting technique, rather than an independent technique of "grabbing the neck". In other words, it can be inferred that it was one of the important kumite (sparring) of martial arts such as Jiaodi at that time. On the other hand, it must be said that the view of "Zuohu" as the name of a martial art is unfounded at this point.

Although the "History of the Han Dynasty" gives a focus to the event itself and does not describe what kind of "technique" it was, it should be emphasized as an important record of the current "technique" of Mongolian wrestling.